

組織キャンプの構成要素に関する一考察

松田 幸也*・北原 澄高**・東原 昌郎

健康・スポーツ科学

(1999年6月4日受理)

1. はじめに

1970年代までの高度経済成長期以前の<教育>は、子供の豊富な直接経験の存在を前提として、その土台の上に知識・記号などの間接経験を積み上げる、という方式で行われてきた¹⁾。この時代までは生活の場が高度に都市化されておらず、子供の遊び場や、近隣の住民との関係が確保されていたことによって、直接経験による学習が成立していたものと思われる。

これに対して、80年代以降の高度情報社会では、メディア、映像などの間接経験がはるかに大きな比重を占め²⁾、子供の学習は、専ら何らかの媒介作用を経た間接的な知識によるものとなり、実感の伴わない、情報としての知識を得ることが主になった。

第15期中央教育審議会答申では、21世紀を担う子供たちの「生きる力」を育成することを重視し³⁾、そのために子供たちの生活体験、自然体験などの機会の増加を求めている。これは、高度に都市化された生活環境において得ることが難しくなりつつある直接経験による学習を補償することを目的としたものである。

これらの直接経験による学習は現代の教育の課題となり、野外教育や野外活動のもつ教育効果が注目されている。

J. Smithら⁴⁾は、野外教育の概念を次のように述べている。

「野外教育とは野外における（In the outdoors）、野外のための（For the outdoors）学習であり、それは理科や算数のように、規定された目標を伴った単一の科目ではない。野外教育とは、ただ単に本物の生き物に触れ、そしてそこで問

題を解決するという直接的実験的な体験の機会の提供、生涯にわたる想像的な暮らしに親しむための技術の獲得、人間と自然環境についての考え方の形成および発展、我々の先祖がしっかりとそして深く関わり合っていた生活場面への回帰などの機会を提供するための学習環境のこと」と指している。」

ここでいう野外教育とは、「野外という場における様々な活動を主体とした教育の一方法」⁵⁾であり、具体的には様々な野外活動を行うことによって、Smithらのいう教育効果を期待するものである。このことに関して、東原⁶⁾は、「特にキャンピングはこれらの個々の野外活動をプログラムとして内包することから包括的な野外活動であると同時に野外教育の教材としての可能性も大きい」としている。

本研究では野外教育における教材として、教育的意図を持ち集団で行うキャンプである「組織キャンプ」の構成要素に注目し、構成要素の持つ特性から、組織キャンプの教育的意義を考察する。

2. 組織キャンプの構成要素について

組織キャンプの構成要素に関連して次のような記述がみられる。

東原⁷⁾は、野外活動の構成要素について、次のように述べている。

「野外教育の教材である野外活動は『自然環境を背景として行われる諸活動の総称』と定義され、それを構成する三大要素は自然環境（活動環境）、人（活動主体）および活動自体であり、これを他の教育活動の教材と比較すると活動環

* 東京工学院専門学校非常勤講師

** 中央大学非常勤講師

境において独自性がある。」

松田⁸⁾は、組織キャンプの構成要素として次の5つを挙げている。

「(1)生活の場としての自然環境 (2)小集団での生活共同体 (3)自然と野外を最高度に活用すること (4)プログラムの融通性 (5)有能な指導者を持つこと」

石田⁹⁾は構成要素の概念を次のように挙げている。

「(1)組織的に行われること (2)意図・目的をもって行われること (3)立案から実施までのプロセスを重視すること (4)指導者が存在すること (5)キャンパーを正しく把握し、理解すること」

また、野沢¹⁰⁾は、組織キャンプの構成要素として期待できる教育効果を次の4つに大別している。

「(1)自然の中で活動することによって期待できる教育効果 (2)共同生活をすることによって期待できる教育効果 (3)生活技術や野外活動技術を学ぶ場面で期待できる教育効果 (4)キャンプ全体に関わって期待できる教育効果」

以上のことから、組織キャンプの構成要素について次のようにいうことができる。

すなわち、組織キャンプは、自然環境の中で行うこと、集団生活をすること、指導者による指導を受けること、によって何らかの教育効果をあげようとするキャンプである。

そこで、本研究では、組織キャンプは (1)人的環境 (2)自然環境 (3)教育的要素の3つの構成要素によって成立するキャンプと定義する。

2. 1 人的環境について

組織キャンプにおける人的環境は、「組織」という用語に象徴されるように、小集団を基に形成された組織である。組織キャンプの組成人数は、10名程度から、学校単位で行われる多人数のものまで様々であるが、組織キャンプが行われる野外においては、すべての参加者が同時に同一の行動をすることは困難であり、効率のよいキャンプ運営のために、参加者を組織化することが必要となる。組織キャンプにおいて形成される組織の様態は、次の2種類に分類できる。

- (1)「生活共同体」：主に生活を持続する上で必要な仕事（炊事、洗濯、居住空間の管理など）を共有し、分業することを目的に組成される共同体。
- (2)「活動共同体」：登山、カヌー、スキーなどの野外活動を行う上で、行動を共にし、構成員をお互いにリードし、フォローする事で活動を円滑に進行さ

ることを目的に組成される共同体。

これらの共同体は組織キャンプの全体構造の中で、タテ・ヨコのつながりを持ち、人的環境の基盤を形成する。このように小集団を基に組織化された生活環境は、現代社会における日常生活に類似した構造であるといえよう。

石原¹¹⁾は、人間の集団性について次のように述べている。

「人間は、まず個人であって、しかるのちに集団を形成するのではなく、はじめは集団として存在し、そのうえで個人への分化があったのである。人間は集団的に感覚し、知覚し、集団的に思考し意欲し、集団的に労働したのである。」

わが国において行われる組織キャンプの期間は、デイキャンプ（1日限りの日帰りキャンプ）から、1週間以上にわたる長期キャンプまで様々であるが、日常生活が恒常的な存在である小社会に組み込まれているのに対して、組織キャンプは、一定の期間を設けて共同生活をするものであり、一時的な存在である社会を形成するという特徴がある。

以上のことから、組織キャンプにおける人的環境には、以下の特徴があると考えられる。

- (1)生活共同体・活動共同体を基にした集団・組織を形成する。
- (2)キャンプ期間中に限られたものである。

2. 2 自然環境について

組織キャンプは主に、文明化されていない環境での生活体験や自然体験を求め、自然の豊富な環境において行われる。そのため、組織キャンプの構成要素として自然環境は欠かせないものであり、単なる生活周辺環境にとどまらず、様々な活動を可能にする資源である。

すなわち、登山など自然の中で行うことを主目的とする野外活動にとっては、自然環境は欠かすことの出来ない野外活動資源である。登山では、「山」の代替物は存在せず、「山」の代わりに高層ビルの階段を登っても、それは登山にはなり得ない。登山が成立するためには、活動主体である登山者と、活動資源である山が必要である。

また、組織キャンプにおける生活の営みにおいても、日常生活ともっとも異なる条件として、高度に文明化されていない環境である自然の存在が挙げられる。高度に文明化されていないことによって、生活形態は日常と大きく異なり、「キャンプにおける生活体験」、すなわち、水を汲む・火を扱う・刃物を扱う、等の行動

が必要になり、また、体験することが出来る。

以上のことから、組織キャンプにおける自然環境には、以下の特徴があると考えられる。

- (1)野外活動を行うための活動資源である。
- (2)非日常性を生み出し、自然特有の体験をキャンパーに与える。

2. 3 教育的要素について

井村¹²⁾は、教育キャンプの意義として次の事柄を挙げている。

- 〔(1)個人の表現と自己開発 (2)人間の相互理解 (3)自然についての理解 (4)野外生活技術の習得 (5)健康と体力の向上〕

ここで挙げられている教育キャンプの意義は、特定の活動を行うことによって獲得できる教育的效果ではなく、組織キャンプ全体の様々な構成要素によって獲得される教育的効果である。

このように、組織キャンプの構成要素としての教育的要素には、様々な内容が含まれているものと考えられる。すなわち、様々な活動を行うこと、自然環境を直接体験すること、集団で生活すること等であるが、指導者の存在、教育的目標の設定なども、教育的要素の一つであり組織キャンプそのものが教育的意図に基づいていることから、教育的要素は、無限に存在しうると考えられる。

本研究では、前述の組織キャンプにおける人的環境・自然環境の特徴を仮設的定義として、社会学・心理学の関連する理論・概念を適用し考察を加える。

3. 人的環境に関する考察

3. 1 集団・組織の概念

塩原¹³⁾は、社会学における組織と集団の概念上の差異について次のように述べている。

〔(1)社会学で組織というのは、それを集団の一種とみなし、組織集団と同一視するのが普通である。その場合、集団が組織を持つというのは、集団の構造化を意味する。つまり、集団成員間の相互作用における『地位と役割』の分化・明確化・制度化をさすのである。組織とは、このような役割の分化－水平的にも垂直的にも－し、明確化している集団をいうのである。

(2)また、『目標達成』のために協力し合っている一群の人々を組織という場合がある。すなわち、集団の目標が明確に定められ、そのための手段が体系化され、その共同目標に向かって、

成員が責任を分担しあっている集団を組織といふのである。こうして、『目標』の有無・明確度、成員の拘束力が、組織の不可欠の条件となる。

(3)しかし、組織を(1)(2)のように、静態的なものとはとらえないで、動的な過程ととらえる考え方がある。つまり、統一目標の達成に向けられた『人間活動』のシステムと考える考え方である。」

また塩原¹⁴⁾は、以上の考え方を要約して、次のように述べている。

「集団の本質は人々の持続的相互作用に求めることが出来るが、組織の本質としては、役割、人々、活動の目的合理的な体系というところに求めることが出来よう。」

八木¹⁵⁾は集団を構成する基本的要件として、次の5つを挙げている。

- 〔(1)ある程度継続的な相互作用 (2)共同の集団目標と協働 (3)集団規範による規制 (4)地位と役割の分化または配分 (5)一体的なわれら感情による緊密化〕

以上のことから、社会学においては集団と組織とは別個のものとしてではなく、次のように捉えられていると思われる。

- (1)成員にとって共通の目的を持ち、継続的な相互作用・集団規範による規制・地位と役割の分化または配分・成員による一体感をもつものが集団である。
- (2)集団がさらに役割の分担・活動の拡充・成員の配置などを体系化したものが組織である。

以上のことを、組織キャンプにおける組織・集団に適用すると次のようにいいうことができる。

すなわち、組織キャンプにおいて形成される生活共同体・活動共同体は、キャンプにおける生活や野外活動を共通の目的として持っている。そのため、キャンパーは自分が所属する集団によって何らかの規制を受け、また集団内における地位と役割の分化または配分によって何らかの役割・地位を獲得し、成員であるという意識を持つようになる。組織キャンプの規模によって様々であるが、生活共同体・活動共同体は単独で存在せずに、複数の小集団として互いに影響を及ぼし合っている。集団が複数存在することによって、役割分担やキャンパーの配置などは体系化され、行われる野外活動はさらに拡充される。したがって、組織キャンプの組織は、生活共同体・活動共同体の集合としての組織である。

E. H. Shein¹⁶⁾は、心理学における組織と集団の概念上の差異を次のように述べている。

「(1)集団とは、互いに相互作用をする。／互いに心理的に意識しあう。／自分たちは一つの集団だとみなす。¹⁷⁾

(2)組織とは、何らかの共通の明確な目的または目標を、労働・職能の分化を通じて、また権限と責任の階層を通じて達成するために人々の活動を計画的に調整すること。¹⁸⁾」

また、佐々木ら¹⁹⁾は心理学における組織と集団の概念を次のように述べている。

「(1)集団とは、『集団を形成している成員の間に何らかの共通の目的、すなわち集団目的がもたれていること。／この目的を達成するために成員間に相互にコミュニケーションがかわされ協力しあう関係ができており、ある程度特徴的な相互作用がもたれていること。／成員間に役割分化がみられ、各役割が全体として一つの組織として統合されていること。／成員の行動や態度についての標準的な枠組みや規範ができるて、成員がそれに従っていること。／成員の間に仲間意識ができており、成員以外の人々と自分たちとを区別するような気持ちが出来ていること。／成員はその集団に所属することに魅力を感じており、集団にとどまろうとする強い愛着をもっていること。』を満たしている状態である。²⁰⁾

(2)組織とは、『組織自体の設定した目標を達成すること。／成員の組織に託した諸欲求の充足（たとえば参加することによって得られる満足、組織目標の達成によって獲得される報償や満足）を、同時に極大化すること。』を命題として持つ。²¹⁾】

以上のことから、組織キャンプの生活共同体や活動共同体および組織キャンプ全体の構造に適用すると、次のようにいうことができる。

すなわち、組織キャンプにおける生活共同体や活動共同体は、キャンプにおける生活や活動を集団目標として持っている。この目標をよりよく達成するために成員間には相互にコミュニケーションをかわし協力しあう必要が生じ、生活共同体や活動共同体の成員間には役割分化と役割の達成が求められる。このことによって成員の間に強い仲間意識が生まれ、集団にとどまろうとする強い愛着を持つようになる。

また、組織キャンプ全体は、野外においてよりよい生活・活動をするという集団の目標を、労働・職能の分化および権限と責任の階層を通して達成するためにキャンパーの活動を計画的に調整する。また、キャン

パーは組織キャンプに参加することによって、活動の安全性、生活の快適性などの報酬や、個人の達成によるよりも大きな満足感を得ることが出来る。

3. 2 集団の構造

集団内の成員の間には互いに何らかの心理学的関係が存在し、それらの関係は全体として一つのまとまりのある形を形成する²²⁾。したがって、組織キャンプにおける生活共同体・活動共同体の中でも、キャンパーの間には何らかの心理学的関係が存在する。

狩野²³⁾はこれらの成員間の心理学的な関係が形作る全体としての形を心理学では「集団の構造」と呼び、「その構造の在り方は集団の特徴を規定するとともに集団としての様々な効率を左右し、また構造内に占める成員の地位はその人の意欲・満足感を規定する重要な要因である」と述べている。

狩野²⁴⁾はまた、Cartwright & Zander, Collins & Ravenを引用して「集団の構造」を次のように定義している。

「(1)集団構造は複数の『成員 (member)』とよばれる人々の集まりについて論じられるものであり（集合性）、(2)その成員と成員との間には何らかの心理学的関係が存在することを前提とし（関係性）、(3)それらの成員間関係が全体として統合されて一つの形を形成し（形態性）、(4)そしてこの型がある程度の安定性を持っているとき（安定性）、このような成員間関係が成立する安定的な形を、その集団の構造と呼ぶ。」

更に、狩野²⁵⁾は以上のように集団構造を定義した上で学級集団を例示し、集団構造の種類を公式的構造、非公式的構造に分類し以下のように説明している。

「(1)公式的構造：何らかの度合いにおいて制度的に形式化されている地位・役割関係によって形成される構造。集団の公式的構造は組織図、役員名簿、委員表などをみるとことによって誰にでもすぐにわかる、いわば“目に見える構造”である。

(2)非公式的構造：同じ集団の中で成員の自発的動機に基づいて生じる『何事か話かける』『好意を感じる』『影響を受ける』等の関係によって形成される構造。この非公式的構造は公式的構造のように誰にでもすぐにわかるというものではなく、“目に見えない構造”である。」

ここで説明されている非公式構造には、インフォーマル・グループやインフォーマル・リーダー、またフォーマルなリーダーに対する信頼感や親近感と言うような非公式的側面として集団の遂行に深い影響をもたらすものがある。

らす事柄も含まれ²⁶⁾、数多くの実験的研究がなされている。

狩野の分類に類似した概念として、E. H. Shein²⁷⁾は組織内における集団のタイプを公式集団、非公式集団に分類し以下のように説明している。

「(1)公式集団：全体組織の使命と関係のある特定の課業を行うために管理者によって入念に作られた集団。その継続期間によって《永続的》公式集団と、《一時的》公式集団の二つに分けられる。ある集団が一時的か永続的であるかどうかは、組織がどう定義するか、また構成員が自分たちをどちらの集団と感じるかによって決まる。」

(2)非公式集団：組織・集団のメンバーが、組織上の役割を果たすだけでは満たされない欲求を、組織の他のメンバーと様々な関係を作ることで満たそうとすることによって発生する集団・個人は常に他の人と何らかの関係を用いたいと言う欲求を持っているので、非公式集団を作ろうとする傾向は常に存在しているが、公式集団の状況と仕事のスケジュールが合わなければ作れない。」

以上の狩野とE. H. Sheinの定義を組織キャンプに適用すると、次のようにいいうことができる。

すなわち、組織キャンプにおいてはキャンプ運営上の組織としての生活共同体・活動共同体の形成によって、公式的構造をもった集団（公式集団）が形成される。組織キャンプは永続的なものではないため、組織キャンプにおける公式集団も、組織キャンプ終了と同時に消滅する一時的公式集団である。また、組織キャンプにおいて発生する非公式的構造を持った集団（非公式集団）は、組織キャンプの期間中、全体組織に深い影響を与え、組織キャンプが終了しても消滅せずに何らかの形で存続することもある。

3. 3 集団に影響を及ぼす要因

心理学的にみて、組織キャンプにおける「公式集団」は、殆どの場合事前の準備段階において何らかの方法で形成されたものであり、組織キャンプの運営を円滑に行うために形成されている。また、組織キャンプにおいて形成される集団は、組織キャンプ全体の欲求とキャンパー個人の欲求を充足する機能を持ち、両者の欲求を充足するか否かは、様々な要因の影響を受けるものと思われる。

E. H. Shein²⁸⁾はこれらの要因を環境的要因、メンバーシップ要因、力動的要因の3つに分類している。

「(1)環境的要因—その集団の環境の文化的、社会的、物理的、技術的な特徴。

(2)メンバーシップ要因—個人的背景、価値観、相対的地位、技倅的特徴などからみたそのグループのメンバーのタイプ。構成員間に基本的な価値観とコミュニケーションの方法に関する意見の一一致が無ければならない。

(3)力動的要因—その集団はどのように組織化されているか、リーダーシップ・スタイル、メンバーがリーダーシップ及びメンバーシップに関してこれまでに受けた訓練の量、その集団に与えられた課業、その集団がこれまでに経験した成功、失敗、その集団の発達レベルなど。具体的には、集団そのものの存続期間におきるいろいろな出来事や過程を含む。これら力動的要因は、集団は刻々と変化しており、また変化できる性質のものであることを明らかにする。」

以上のE. H. Sheinによる集団への影響要因を、組織キャンプにおける集団に適用すると、次のようにいいうことができる。

(1)環境的要因—自然環境のなかで、特殊な生活技術を必要とする生活を送る。空間的には、文明社会から隔離されるものである。

(2)メンバーシップ要因—組織キャンプに参加したキャンパーには、経験の差や個性の差があっても、同一の立場で活動を開始するものであり、組織キャンプの期間中に集団内において形成される関係が、もっとも大きなメンバーシップ要因である。

(3)力動的要因—組織キャンプにおいて形成される集団は、次々と解決すべき問題に直面し、それらを解決しながらキャンプ生活を送る。すなわち、組織キャンプにおける集団に対する力動的要因は無数に存在する。

以上のように、環境的要因、メンバーシップ要因、力動的要因にわたって、組織キャンプにおける集団に影響を及ぼす要因には様々なものがあり、これらの要因によって、組織キャンプ特有の集団が形成される。

3. 4 集団の機能

大橋²⁹⁾は、社会学的見地から集団の機能についての様々な見方を次の3つに大別している。

「(1)集団員に及ぼす集団の影響 (2)集団それ自体の存続・発展のための機能 (3)集団が一つの全体社会に対して及ぼす影響」

以上のように分類した上で大橋³⁰⁾は、次のように述べている。

「集団の機能の本質を形作っているものは上記の(2)の、『集団それ自体の存続・発展のための機能』であって、(1)及び(3)の機能はそれから派生するものと見ることが出来る。従って、集団それ自体の存続・発展の機能の内容を成すものは何かということが、集団の機能を論ずるにあたって主要な問題となる。」

このことを組織キャンプに適用すると次のように言うことができる。

すなわち、組織キャンプにおける集団にも、集団がキャンパーに影響を与える機能、キャンパーが集団を存続・維持させる機能、そして、組織キャンプ全体を一つの社会として捉えたときに、キャンパーによって構成される集団が組織キャンプ全体に対して影響を及ぼす機能がある。

E. H. Shein³¹⁾は、集団が果たす組織の基本的な使命と一致する活動を「集団の公式組織上の機能」とし、その内容を次のように分類している。

〔(1)《複雑かつ相互依存的な課業を実行する》機能 (2)《新しいアイディアや想像的な解決を生む》機能 (3)《連絡または調整をする》機能 (4)《問題解決をする》機能 (5)《複雑な決定の実施を容易にする》機能 (6)《社会化または訓練をする》機能〕

また、E. H. Shein³²⁾は個人に対して集団が果たす主な機能を次のように列挙している。

〔(1)《親和欲求》，友情、支援、愛への欲求を充足させる。(2)《一体感》を発展させ、強め、確かめ，《自尊の念を維持》させる。(3)《社会的現実性を確立したり、確かめる》ための基本的手段となりうる。(4)《不安、心配、無力感を和らげる》基本的手段となりうる。(5)《問題解決、課業達成機構》となりうる。〕

以上のように集団の機能を述べた上で、E. H. Shein³³⁾は、「我々の基本的な心理欲求の多くは集団で満たされる」と述べている。

組織キャンプにおいて、キャンプ運営上の組織としての生活共同体・活動共同体の形成によって、公式的構造をもった集団（公式集団）が形成されることは前項でも触れたが、上記のE. H. Sheinの「集団の機能」を組織キャンプに適用すると、次のようにいうことができる。

すなわち、組織キャンプにおいては公式組織上の機能を意図して生活共同体・活動共同体などの公式集団が形成され、それぞれが期待される集団の機能を發揮することで円滑な組織運営が成されている。また、組

織キャンプの成員であるキャンパーに対して公式集団・非公式集団は、「親和欲求」・「一体感」・「社会的現実性の確立」・「不安、心配、無力感の解消」・「問題解決」等の影響を与える機能をもち、これらの影響を受けることによってキャンパーは組織キャンプの中で社会心理学的な位置を見出すことになる。

4. 自然環境に関する考察

4. 1 自然環境の概念

自然環境に関する概念を規定するには、まずより広義な概念である「環境」についての概念を抽出する必要がある。

人間と環境について考えることは、広範な思考であると共に概念的な思考である。鈴木³⁴⁾は、人間にとつての環境の複雑さを、単純な模式によって次のように説明している。

〔最初に考えられる単純な模式は、
〔自然↔人間〕〕

という模式である。人間は自然の中で作り出され、その中に生きている。自然から生活のために必要な資材を手に入れ、それを利用して生存を図ってきた。自然そのままで、それに対し特別に手を加えない状態で営まれる生業活動は、狩猟・採集活動であるが、この活動の段階ですでに技術が工夫されている。この技術は動・植物の自然誌についての知識を基にし、また利用可能な資材によって道具を作り、それに加えて人間の活動を組織的に動員している。従って、模式は

〔自然↔技術を持った人間〕

と書き直される。技術は人間の装備であり、それは生業活動だけではなく、消費活動にも用いられる。たとえば火を使うこと、住居を作ることなどがそれである。

人間の作り出した技術は、人間の装備であると同時に、時に物質化し、また時に行動を規制するシステムとして環境条件の一つになる。このようにして、模式は

〔自然・技術↔人間〕
と書くこともできる。

次に考えなくてはならないことは、人間の作り出す社会組織である。社会組織は考え方によつては技術の中に包摂されたものとして位置づけることが出来る。自然に対して働きかける際に必然的に社会を組織化することが必要になる

という意味で、あるいは人間の集団を運営する技法という意味で、技術の下位概念として扱うことが可能である。～中略～

人間が小規模な集団を血縁・地縁によって構成している段階では、社会組織の比重は小さい。しかし、集団の拡張に伴い、より複雑な組織が必要となるとき、それを技術として一括しておくよりは別に扱う方が事態を明瞭にするからである。組織は人間と人間の関係を整理するシステムで、それが作られると個々の人間にとては外在化されたものとして機能し始める。こう考えると、模式は

〔自然⇒技術と社会組織をもった人間〕

あるいは

〔自然・技術・社会組織⇒人間〕

と書かれることになる。」

鈴木³⁵⁾はさらに「言語」によって人々が持つ異なる世界についての相互理解が可能になるという観点から、ある集団にとって「言語」は共通の環境を作り出す働きをしているとして、上記の人間と環境とをとりまく諸要素の模式の中に加えたうえで矢印を除き、最終的な模式として〔自然・技術・社会組織・言語・人間〕と表現している。

このように、人間は自分の作り出した環境を身にまとめて生きており、人間に対する環境という場合にはこれらの概念が含まれる。

以上のように、社会学における「環境」の概念には多様な意味が含まれているものと思われるが、人間と環境とを考える研究概念として、次の2つを挙げることができる。

- (1) 現代社会における情報とコミュニケーションによって形成される「擬似環境」。
- (2) 人間への生態学的アプローチにおいて考えられる「環境」。

また、心理学においては、研究主体である人間の行動を様々な規制要因である環境との関連において考察する研究が数多くなされている。このような背景から、心理学における「環境」は様々な形で捉えられてきた。E. Klupat³⁶⁾は、心理学における「環境」の解釈の推移を次のように述べている。

「初期の心理学においてはもっぱら人間の内面に注意を向けており、社会的な環境から隔絶されているかのようにして個人を分析してきた。初期の内省主義から、精神能力テストやパーソナリティーの測定、あるいは記憶、知覚、精神病理の研究まで、心理学は行動の要因として個

人を取り巻くものよりも、むしろ個人の内面を見ることに主に焦点を当ててきており、これらの方針が心理学の支配的な志向であった。

第二次世界大戦後、K. Lewinの先駆的な研究³⁷⁾がこの状態を変えたといえる。K. Lewinは、行動は個人と環境の関数として規定される『B = f (P, E)』という公式を立て、外的な影響力が内的な影響力と作用しあって行動が決定されることを認めた。この研究を契機に、社会心理学の分野が発展してきたのである。K. Lewinの研究以来、心理学の焦点は、人々の特性の違いやセッティングの違いを強調するのではなく、個人と環境の関係とその相互作用にむけられるようになった。」

以上の歴史的推移から解るように、人間の行動は外的影響因子と内的影響因子の相互作用によって決定されるという考え方方が広く浸透しており、環境は内的影響因子、外的影響因子の両面に関連のある要素であると考えられている。

相馬らは³⁸⁾、心理学における環境は「物理的環境」と「心理的環境」とに区別されるとし、次のように述べている。

「物理的環境は、『地理的環境』とも呼ばれるものであり、人間がそれを意識したり認知したりすることに関わりなく存在するものである。たとえば郵便ポストはつねに同じところにあるが、気がつかないでいる場合が多い。また土地不案内の旅人が雪の原の上を歩いてきた。しかし実際には湖水の上に氷が張り、その上に雪が積もっていた上を歩いてきたのだという例がこれを説明するときによくあげられる。郵便ポストも湖水も、人間が認知するしないに関わらず存在するものである。したがって物理的環境は人間を抜きにして考えることが出来る。」

一方の心理的環境は、『行動的環境』とも呼ばれるものであり、これは人間がそう見たり感じたりしている環境ということである。旅人の例でいえば、旅人は雪の原という認知をしたからこそ、その上をなんとも思わず歩いてきたのであり、そのときの心理的環境には湖水というものはなかったということになる。

このように人間が行動する、反応するといった場合には、心理的環境に依っていると言うことが出来る。これはその外側に存在する物理的環境とは異なるものである。」

以上のことと組織キャンプに適用すると次のように

いうことができる。

すなわち、組織キャンプとは、学校教育や社会教育の場において、教育的意図を持ち、一定の期間、一定の集団で社会を形成し、自然環境を背景に行う野外活動であり、キャンパーが特別に認知しなくとも自然環境は「物理的環境」として存在する。

しかし、生活の場が人工的に利便化されていない、すなわち自然環境の豊富な場であるということはキャンパーにとって日常生活と大きく異なる点であり、自然環境をまったく意識せずに生活をすることは困難である。また、組織キャンプで行われる野外活動は、自然を直接体験する機会が豊富な活動である。例えば、登山は自然環境の豊富な山岳地帯で行われ、登山者は、足元に咲く花や、頭上にそびえる樹木などを知覚し、自然に対して何らかの意識を形成する。すなわち、組織キャンプにおける自然環境は、キャンパーの「行動的環境」としても存在する。

4. 2 擬似環境について

今日、日常生活環境は山や海や野原や川などの豊富な自然の物理的環境ばかりではない。例え都會から離れた山里の農村に住んでいても、人の手が入っている以上何らかの人工的な環境が存在する。また、物理的なもの以外に目を向けると、日常生活環境には政治や経済、通信などの文化的な環境が存在し、目に見えない仕組みで結び付けられて日々の生活を送っている。このような状況の中で生活している人間は、直接に接していない事柄について知ったり、判断したりする必要に迫られる場面がある。直接的ではない事象についての知識を得るためにには、それらを記号化した観念的様相に接する。すなわち、環境像には、直接に経験したものと、何らかの情報を仲立ちとして間接的に経験したものとが存在する。

藤竹³⁹⁾はマス・コミュニケーションの環境造成功力に関連して、擬似環境について次のように述べている。

「人間にとって環境とは、環境の主体としての人間が、外的条件の中から彼にとって有意味な諸条件を取り出し、それらとの間に作り上げた『関係』のシステムである。そして、人間の環境に対する適応は、環境の象徴化を通して行われる。ところが、人間が直接的に自分の手で検証することの出来る範囲を超えた、つまり間接的に（他人の媒介によって）接触することによってはじめて入手できる環境部分は、今日きわめて大きい。この環境部分については、人間は他人がシンボルを操作することによって作り

上げる状況の定義付けに依存している。現代においては、人間と彼が行動を要求されている環境世界、すなわち現実環境との間には膨大な象徴化された環境、すなわち擬似環境が挿入されることになる。

人間はマス・コミュニケーション活動が提示する擬似環境を通して、自己を拡大する。マス・コミュニケーション活動は環境の動向を＜記録＞する活動であるが、それは記録者である送り手の視点に立って選択され、象徴的に定義付けられた環境である。こうして、マス・コミュニケーションは、単に環境の動向を＜伝達＞するだけではなくて、人間に対して環境を作る側面を持つことになる。～中略～

ところが人間は、マス・コミュニケーションが指定する環境について、自分の力でそれを検証し確定する力を殆ど持っていない。こうして、人間にとっては擬似環境それ自体が、現実環境の＜写し＞であり、その要約であるという関係が生まれる。人間は間接的な検証を超えた領域にある環境（そして現代では人間にとて重要な環境）については、圧倒的に他人の状況の定義付けに依存している。人間は環境の主体であり、彼は彼の環境を自らの力で確定しなければならない。こうして、人間にとっては、擬似環境の中にしか環境を見出しえないとする事態が生まれる。これを擬似環境の環境化といふ。」

以上のことを組織キャンプに適用すると次のようにいふことができる。

すなわち、キャンパーは組織キャンプ以前に様々な情報によって擬似環境を形成しており、自然環境に関しても情報によって得た知識によって形成された認識を持ち、擬似環境の環境化を行っている。しかし、組織キャンプにおける自然環境に限っては、次のように考えられる。

すなわち、組織キャンプにおける自然環境は、野外活動を行うための活動資源である。キャンパーは、組織キャンプの場に存在する自然環境を使って、野外活動を行い、キャンパーにとっての自然環境は、紛れもなく自分が直接見、聴き、触って体験することによって知った自然であり、「擬似環境」とは決定的に異なるものである。したがって、組織キャンプにおいて自然環境を直接体験することによって、日常生活において行っている擬似環境の環境化とは異なる、環境の直接認識をすることが出来る。

4. 3 生態学的環境について

現在の社会学において生態学的に環境を捉えるということは、今日社会的に問題とされている「環境問題」に対して、人間・社会の在り方を生態学的に問い合わせ直すという見地に立つものと考えられる。

沼田⁴⁰⁾は生態学の基礎的な概念について次のように述べている。

「生態学の基礎的な概念としては、ヘッケルが関係学として位置づけたように、環境作用（無機的環境要因の生物への影響）、環境形成作用（生物が無機的環境に働きかけて新しい環境を作り出す作用）、生物間相互作用（競争、協同、相害、寄生、共生などの作用）といった3つのカテゴリーの『関係』が基礎になった。」

これを別の言葉では『生物と環境の関係を研究する分野』といい、教科書での生態学の定義とされてきた。しかしこの場合の生物は植物、動物、微生物であって、人間は入っていない。生物を扱うのは、大学では理学部の生物学科であるが、ここでもやはり人間は扱わない。人類学科がある場合でも、まさに人類であって、未開社会などを扱い、現代の文化社会に生きている人間はふつう扱わない。現代の人間の体を扱うのは主に医学であるが、それも病気や治療の側面から扱うだけで、心身を清め、地球生態系の一員としての人間を全体的に扱うことではない。もちろん、人文科学や社会科学は人間を広く扱ってはいるが、自然科学的あるいは生態学的に人間を全体的に扱ってはいないのである。

そういう点では最近のlandscape ecology（景相生態学）の目指すものが近い立場にあるといえよう。」

以上のことばは次のように解釈することができる。すなわち、自然環境という概念が生態学において位置付けられるにあたり、「人間を取り囲む自然的要素全体（人間を含む）」について取り上げるべき処であるが、実際に一般的な生態学において「自然環境」として取り上げられているものは、環境作用としての大気、水、土壤、光のような無機的要因の働きなのである。

また、沼田⁴¹⁾は、次のようにも述べている。

「小川に行って水温をはかったり、光をはかったり、環境をはかった事にならないのはなぜか。水温が15℃であったとしても、それは外界の条件がはかられただけであって、その温度が川に住む魚なり水草なり、ここに来ている中学生にとって、どういう意味があるのか、生態系

の主体である生物や人間にとてどういう関わりがあるのかを明らかにしないと、環境をはかった事にはならない。」

以上のことを組織キャンプに適用すると次のようにいいうことができる。

(1)自然がキャンパーに与える影響について

組織キャンプでは、トイレがままならない、シャワーを浴びることが出来ない、エアーコンディショナーがない、虫が嫌いであっても、蚊やブユは容赦無く寄ってくる、等の不便がある。これらの条件は、組織キャンプにおいて、自然環境から人間が受ける物理的影響であり、キャンパーは適応を迫られる。また、自然環境の中で一定の期間生活をすることで、キャンパーは自然環境に対して親近感を抱く可能性もあり、逆に嫌悪感を抱く可能性もある。さらに、自然環境に関する新たな知識を習得する可能性もあると考えられ、これらは自然環境から人間が受ける心理的影響である。

(2)キャンパーが自然環境に与える影響について

人工的環境と自然環境との境界が明確な現代社会では、自然環境の中で組織キャンプが行われるということは、人間が自然環境に進出することを意味する。この場合の進出は、農耕や狩猟などに代表される何らかの生産を目的にしたものではなく、自然環境の中で生活をはじめとする諸活動を目的とする。人間にとっては、自然環境を求めて行う何らかの目的を持った活動であり、自然環境に対する配慮を踏まえるべき活動であるが、組織キャンプが行われる自然生態系にとっては、それまでは存在しなかった人間が押し寄せ、そこで生活をはじめとする諸活動によって様々な影響を自然生態系に与え、また去っていくものである。

4. 4 物理的環境としての自然環境

物理的環境として自然環境を捉えてきた心理学的研究は、自然環境の要素が、人間にどのような影響を与えるのか、また自然環境を人間がどのように知覚するのかを探るものである。また物理的環境としての自然環境の認知は、眼・耳・鼻・舌・皮膚などの感覚受容器と大脳との一連の働きで行われる。⁴²⁾

相馬ら⁴³⁾は、物理的環境の知覚的特性を、次のように説明している。

「場所と行動の結合がどのように成立するかを明らかにするには、行動の機構について心理学的な推論を行うという作業を必要とする。この考えに立てば、行動に対する刺激としての物理的環境の次元が取り上げられることになる。物理的環境は刺激として感覚・知覚的プロセス

に作用し、それ自体をあらわにするのである。」すなわち、組織キャンプにおけるキャンパーの行動について心理学的な推論をすることで、自然環境をはじめとする組織キャンプの諸環境とキャンパーの行動の結合がどのように成立しているかを明らかにすることが可能であり、言いかえれば、組織キャンプにおいて自然環境は、刺激的要因としてキャンパーの感覚・知覚的プロセスに作用する。

5. 結語

組織キャンプの構成要素である人的環境（集団）および自然環境に対する社会学および心理学の諸概念の抽出は、組織キャンプにおける集団および自然環境がもたらす教育効果を具体的に説明する材料となった。

まず、組織キャンプの構成要素としての人的環境には、次のような特性を見出すことが出来た。

すなわち、組織キャンプにおける人的環境は、集団によって構成され、キャンパーは集団に所属することによって、集団から様々な社会的影響、心理的影響を受けている。この社会的影響にはキャンパーの社会性を高める効果がある。また、心理的影響としてはキャンパーに「親和欲求」、「一体感」、「社会的現実性の確立」、「不安、心配、無力感の解消」、「問題解決」等がある。

次に、組織キャンプの構成要素としての自然環境には、次のような特性を見出すことが出来た。

すなわち、組織キャンプにおける自然環境は、キャンパーの自然環境に対する認識に影響を及ぼす。自然環境を直接体験することは、社会学的には、情報によって形成された擬似環境を直接認識による環境に修正し、自然生態系に対する概念の形成に有効である。また、心理学的には、自然環境の諸要素がキャンパーを心理的・生理的に健康にする効果を与え、主体－客体の関係において、自然環境との一体的関係に関する概念形成に有効である。

以上のことから、組織キャンプの構成要素は社会性の育成に資する機能を持つものと考えられる。社会が豊かに、平和に、快活に営まれるためには、社会の構成員の一人一人が、豊かな社会性と人間性を身につけていなければならず⁴⁴⁾、ここに、ひとつの組織キャンプの教育的意義を見出すことが出来る。

また、組織キャンプの構成要素は現代の人工化された環境において欠如しがちな自然環境に対する概念の形成を促す機能を持つものと考えられる。自然に対する望ましい概念を形成し、人間と自然との関係を改善

することは、現代社会が直面する緊急の課題であり、ここに、組織キャンプの教育的意義を見出すことが出来る。

引用・参考文献

- 1) 高橋勝：人間形成空間の再生。高橋勝・葉養正明・望月重信編 新版教育キーワード。時事通信社：東京, p. 227, 1997.
- 2) 前掲書1), p. 227.
- 3) 前掲書1), p. 108.
- 4) J. Smith 他 長谷川純三監修 芳賀健治訳：新しい野外教育。不味堂出版：東京, pp. 29-30, 1985.
- 5) 野口和行：野外教育の現代的意義に関する研究。東京学芸大学修士論文, p. 71, 1991.
- 6) 東原昌郎：野外教育における環境教育に関する一考察。東京学芸大学紀要, 5-45 : p. 166, 1993.
- 7) 前掲書6), p. 167.
- 8) 松田稔：ザ・キャンプ - その理論と実際。創元社：東京, pp. 32-34, 1978.
- 9) 石田裕一郎：組織キャンプの機構とその機能。石田裕一郎・斎藤保夫編 現代野外教育概論。海声社：千葉, pp. 39-40, 1986.
- 10) 野沢巖：キャンプの意義と目的。日本野外教育研究会編 キャンプテキスト。杏林書院：東京, pp. 6-7, 1989.
- 11) 石原寿：自然と人間－学習と教育の原理。法政大学出版局：東京, p. 78, 1985.
- 12) 井村仁：教育キャンプ。日本野外教育研究会編 野外活動テキスト。杏林書院：東京, pp. 112-113, 1988.
- 13) 塩原勉・松原治郎・大橋幸編：社会学の基礎知識。有斐閣：東京, p. 40, 1969.
- 14) 前掲書13), p. 40.
- 15) 八木正、本間康平・田野崎昭夫・光吉利之・塩原勉編：社会学概説。有斐閣：東京, p. 120, 1988.
- 16) E. H. Shein：松井賛夫：組織心理学 原書第3版。岩波書店：東京, pp. 306, 1981.
- 17) 前掲書17), p. 162.
- 18) 前掲書17), p. 17.
- 19) 佐々木薰・永田良昭編：集団行動の心理学。有斐閣：東京, pp. 394, 1986.
- 20) 蜂屋良彦、前掲書19), p. 18.
- 21) 浜口恵俊、前掲書19), p. 179.
- 22) 狩野素朗、前掲書19), p. 44.
- 23) 狩野素朗、前掲書19), p. 44.
- 24) 狩野素朗、前掲書19), p. 44.

- 25) 犬野素朗, 前掲書19), pp. 45 - 46.
- 26) 犬野素朗, 前掲書19), p. 44.
- 27) 前掲書16), pp. 163 - 164.
- 28) 前掲書16), pp. 167 - 168.
- 29) 前掲書13), p. 339.
- 30) 前掲書13), p. 339.
- 31) 前掲書16), pp. 168 - 169.
- 32) 前掲書16), p. 170.
- 33) 前掲書16), pp. 171 - 177.
- 34) 鈴木継美：人類生態学の方法. 東京大学出版：東京,
pp. 27-30, 1980.
- 35) 前掲書34), p. 30.
- 36) E. Klupat 藤原武弘監訳：都市生活者の心理学：都会
の環境とその影響. 西村書店：新潟, pp. 5 - 6, 1994.
- 37) Lewin, K : D. Cartwright, Ed : Field theory in social
science. Harper : NewYork, 1951.
- 38) 相馬一郎・佐古順彦：環境心理学. 福村出版：東京,
pp. 14 - 15, 1976.
- 39) 藤竹暁, 前掲書13), p. 366.
- 40) 沼田眞, 伊東俊太郎編：環境倫理と環境教育. 朝倉書
店：東京, p. 139, 1996.
- 41) 沼田眞, 前掲書40), p. 140.
- 42) 前掲書38), pp. 57 - 58.
- 43) 前掲書38), p. 48.
- 44) 森田勇造：野外文化論. 学習研究社：東京, p.54,
1987.

A Study on the Composition of Organized Camps

Yukiya MATSUDA , Sumitaka KITAHARA and Masao TSUKAHARA

Department of Health and Sport Sciences

ABSTRACT

The purpose of this study is to consider the educational effects of the composition of organized camps.

The composition of organized camps is as follows;

1. Human environment.
2. Natural environment.
3. Educational factor.

The human environment of organized camps is created by the group has social and psychological effects on every camper. The details of these effects are as follows;

1. Desire for friendship.
2. Feeling of “oneness” is created.
3. Establishment of social reality.
4. Anxiety and feeling of incompetence is dispelled.
5. Problem solving in campers is encouraged.

The natural environment of organized camps will effect campers' recognition of their natural environment. Experiencing nature in organized camps will have social and psychological effects on every camper. The details of these effects are as follows;

1. Correct misinformed recognition of environment which is created by the information-oriented society to firsthand recognition of environment.
2. Study of the ecology of nature.
3. The element of nature makes campers both psychologically and biologically healthy.
4. Creates recognition of nature and camper as one.

The composition of organized camps have a function, which train social ability and the “prosperity” of humanity that can keep society peaceful and successful, and which stimulate the recognition of natural environment which is often lacking. Organized camps have the possibility to solve urgent problems which must be improved in the human-environment relationship. These aspects of learning shed light upon the educational significance of organized camps.